

能杜若 恋之舞

渡部 孝子

夢かなひ杜若」のシテに挑むとふ案内を受く秋の半ばに

にちにちに友はヴォイストレーニングを怠らず晴れの舞台へ修行きびしき

松涛のゆるき坂道昨日までの雨がちも今朝は真青なりけり

杜若の咲き乱るるはいとをかし彩もひとしほ濃むらさきなる

名にし負ふ三河の國の八橋にひとり立ち寄るワキ旅の僧

若女の面を付けてたちまちに幽玄の世へ擲り足となる

唐衣に御所車と花あしらひて纏ふ里女の姿愛らし

「かきつばた」の五つ文字を読み込みし歌朗朗と透る橋掛かりに

里女いつしか花の精となり夕の庵へいざなひゆける

透き額の初冠着し太刀も差し業平が五節の宴の姿

張りのある長絹の広袖なびかせて恋之舞まふ業平と高子

つかの間の恋に結ばるる業平と高子の追憶夢かうつつか

業平は歌舞の菩薩の化身とて歌へばあまた成仏なると

観世流宗家の地謡お囃子と後見達に守られ舞ひ終ふ

配らるる手拭ひの図柄かきつばた淡き紫ひろげ鮮やか